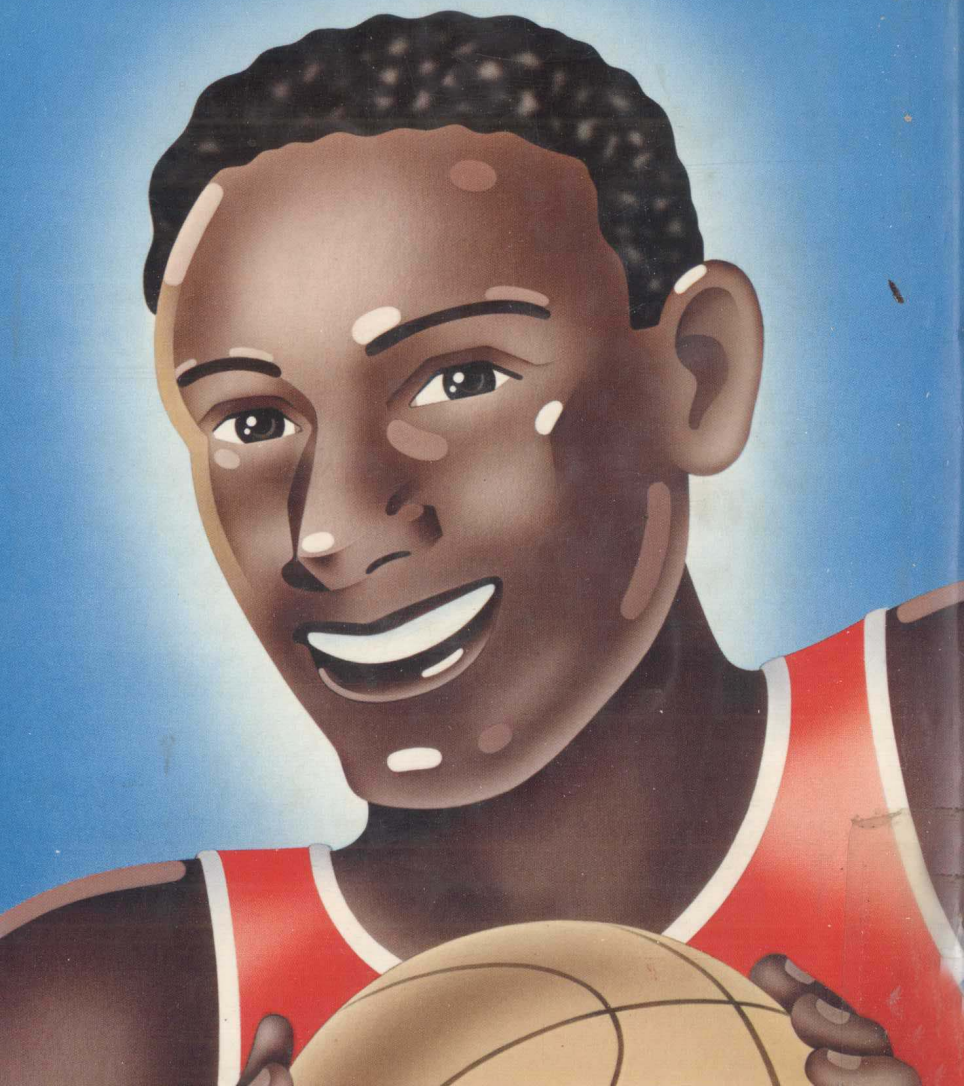
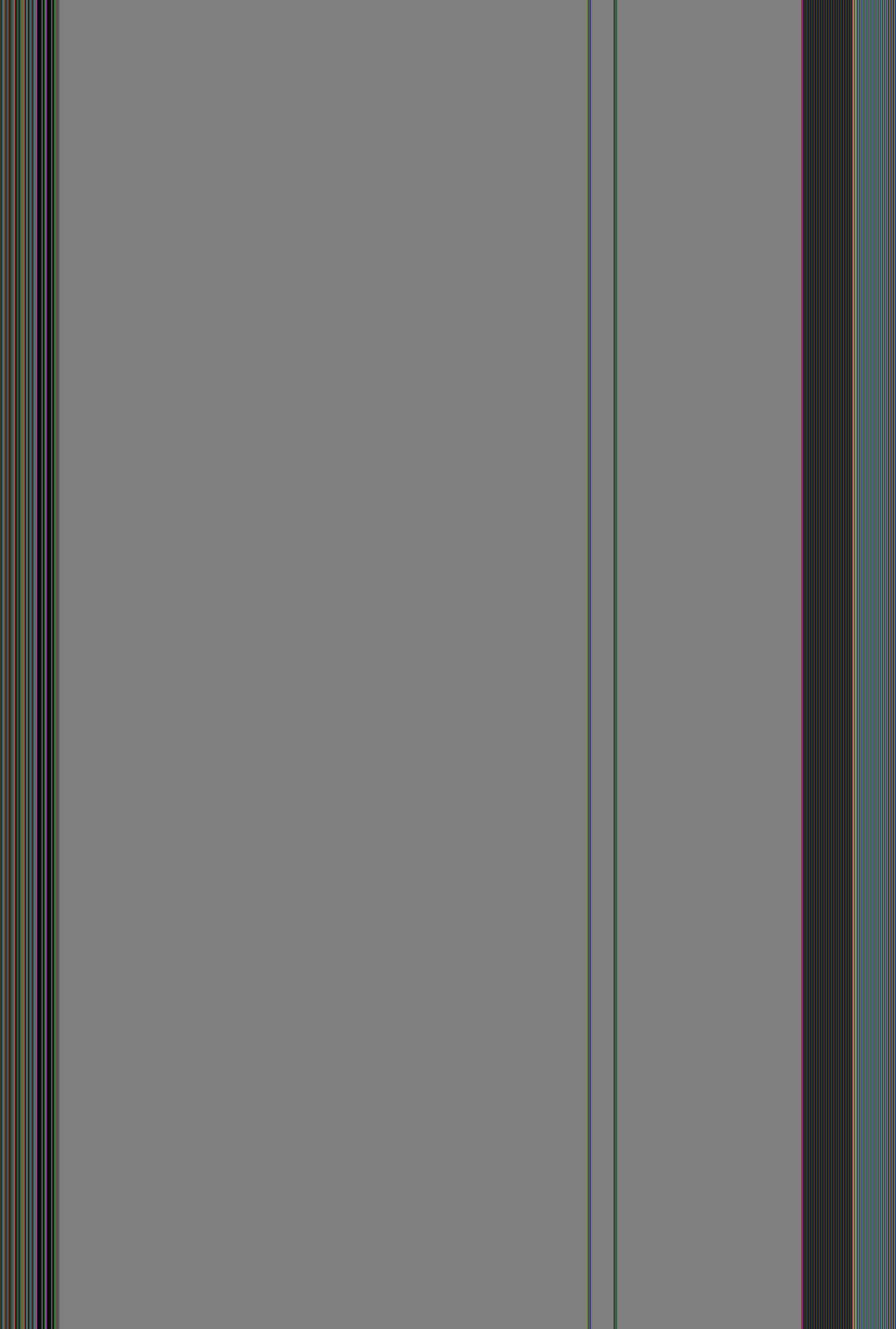


跳べ、ジョー! ^{ビー}B・^{ビー}Bの魂が見てるぞ

川上健一





■初出誌一覧

跳べ、ジョー！ B・Bの魂が見てるぞ	(小説現代 52年6月号)
オレンジ色のロリポップ	(小説現代 52年11月号)
打ってみやがれ！	(小説現代 52年8月号)
酔っ払いのブルース	(小説現代 53年2月号)
熱いトライ	(GEN 71 爽秋号)
ロフト・マン・オイルスター・ボーイズ	(小説現代 52年7月号)
スーパードクロス・プレー	(小説現代 53年8月号)

跳べ、ジョー！

B・Bの魂が見てるぞ

定価 八八〇円

第1刷発行 昭和53年11月27日

著者 川上健一

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社



〒112 東京都文京区音羽2-12-21
電話東京(03) 945-1111 (大代表)

振替 東京8-3930

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

製本所 藤沢製本株式会社

落し本・乱し本はお取り替えます。

© KENICHI KAWAKAMI 1978 Printed in Japan

目次

跳べ、ジョー！ B・Bの魂が見てるぞ	7
オレンジ色のロリポップ	53
打ってみやがれ！	83
酔っ払いのブルース	125
熱いトライ	157
ロフト・マン・オールスター・ボーイズ	187
スーパー・クロス・プレー	223
あとがき	265

装丁／秋山育

跳べ、
ジョー！

B^{ビー}・B^{ビー}の魂が見てるぞ

跳^とべ、
ジ
ョー！

B^ビ・
B^ビの魂が見てるぞ

——ダンクシュート——

ダンクシュートとは、バスケットボールのシュートのひとつである。ジャンプ一番、バスケットリングの上から、スナップを利かせてボールを叩き込むシュートの事で、背が高く、しかもジャンプ力がなければ難しいシュートである。バスケットボールの、数有るシュートの中でも、最も力強く、最もエキサイティングなシュートである。

「おい、黒んぼ！ お前はなぜ目の色を変えて、ダンクシュートばかりやるんだ。一体全体どういうつもりだ。え？ ジョー」

体育館でB・Bとシュートの練習をしていると、ハンクの頼馬野郎がまたまた喚くんだなあ。この白カボチャは、俺と顔を合わせるたびに喚くんのだ。どうしてだ、なぜだってね。ハンバーガーが一遍に百個は入りそうな口から唾を飛ばして睨むんだなあ。まったく阿呆の見本みたいな野郎だよ、ハンク中尉は。馬鹿ばかりいから、俺もすっとぼけたもんさ。

「なぜって、ハンクさん。それはですね、つまり、ダンクシュートはスカッとするからですよ。それ

に僕は、ジャンプ力もありますから。ええ、そうなんですよ、ハンクさん。僕は月までだって届くんですから」って言ってやったんだな。

「おい、こら、まて。いいか、よく聞けよ、この黒んぼ。お前がだな、この前の試合でダンクを何本外したか、解ってないみたいだな。少ない数じゃないな。だいたいお前は背が低いんだ。いいか、お前にはダンクなんて無理なんだぞ。それをだ、お前は無理矢理ダンクをしている。そのうちの何本かまともに入れてりゃ、うちのチームの勝ちだったんだぞ。この所をようやく頭にたたき込んでおけ。いいか、これからは私のいうことをよく聞くんだ。でなけりゃ、お前は明日から毎晩、ミサワ基地中の便所掃除をして、足を鍛える事になるぞ、解ったか、黒んぼ」ハンクの頓馬野郎が、今日はまたえらい剣幕で言うんだ。

「解りました。解りましたよ。ハンクさん。解りましたから、お願いですから僕に顔を近付けないでください。僕はあつちの方は、まだ興味が無いんですから」

B・Bのやつが馬鹿みたいに笑ったね。真黒い顔で、デッカイ真白い歯を剥き出してさ。世界中の笑いを一手に引き受けたかと思うぐらいに馬鹿笑いしてから、この黒んぼは言ったね。

「アー、ハンクさん。我が空軍が誇る偉大な通信士、黒んぼの「ハンサム」ジョー君はすな、つまり、合衆国の為^{ため}に敢然とダンクにトライしている訳でして」

ハンクは、千秒ぐらいもB・Bを睨んでから、いんぎん無礼に言ったね。

「ホウ、じっくり聞かせてもらいましょう。黒んぼの將軍殿」

五メートルはあろうかと思われるB・Bが、まるでマンハッタンの屋上から見下すように、ふやけた白カボチャのハンクに言ったんだ。

「つまりですね、ジョー君は一メートル七十五センチしか無い訳です。なるほど、ジョー君の高さは、それこそ、日本の小学校でバスケットをするのがよいところでしょう。そう思うでしょう、ハンクさん」

「イエス・サー、アイアイ・サー。將軍殿」

「そこで、ジョー君は素晴らしい事を考えました。そうなんです。驚いた事に、この黒んぼは考える事ができるんです。なんともはやびっくりしました。まあ、それでこそ偉大といえるのですが、この黒んぼはこう考えました。そして言いましたです」

呆れた事に、B・Bのやつは俺にそっくりな声と、身ぶり手ぶりで喋り出したんだ。この男ときたら、誰の真似でも、すぐやってしまうんだからな。この前なんか、酔っ払って夜中の十二時に宿舎の放送室でやったもんだ。いやあ、あれは傑作だったな。消燈が過ぎて、みんなライオンのようないきをかきながら寝静まっていたんだ。その静けさの中に、突然、スピーカーボックスから、なんと、マリリン・モンローの悩殺的な声が流れ出したんだ。ポリュームいっぱいだ。「ハアイ、お元気？ あたし一人で寂しいの」いやビックリしたね。もう大騒ぎさ。一通り男殺しの文句を言った後に、あの時の声を出しやがってさ。「アッハン、ウッフン」したらみんなシーンとなったな。次の日は、百人ばかりも染みの着いたシーツをランドリーに持って行ったもんさ。不細工なゴリラのような身体をしていて、それ程、物真似がうまいんだなあ、B・Bは。

「こう言ったんです、ハンクさん。『おい、B・B。俺はこれまで我が合衆国の為になる事なんて、何ひとつできなかった。だが、君も喜んでくれ。やっと見つかったんだ』この黒んぼが目をギョロつかせて言ったもんです。『つまり、ダンクシュートだ』『ダンクシュートが合衆国の為になるって？』

『まあ落ちて聞いて聞きなよ、B・B。つまりだな、俺はチビだから誰もダंकはできないと思ってるだろう。そこでだ、実はハンクさんと賭をしようと思うんだ。もしもだな、俺が試合でダंकを決めたら、ハンクさんには、国へ帰って百姓をやってもらうんだ』

ハンクの白カボチャが慌てて遮ったね。

『おい、こら、ちょっと待て、待てたら、おい』

B・Bは御構い無しに喋りまくったね。

『』ということはだな、おいB・B、ここからが大事なところだからよく聞いてくれよ。要するにだ、ハンクさん一人が国へ帰ってしまったえば、俺達兵隊の評判は上がるな。誰にだって？ もちろんミサワの人達にだ。それも女にだ。つまり、アメリカの兵隊さん達は、ハンクさんが帰ったので、みんなハンスムで、みんな逞しくて、おまけにあれが強く、お金持ちと言われるようになるんだ。解るか、B・B。俺の言いたい事が。つまり、ダंकが合衆国の為になるって事がだ。だからだな、ハンクさんに内緒でダंकを一生懸命練習してだ、入るようになったら、ハンクさんに言ってみようと思うんだ』と言ったんですよ。ところで、ハンクさん。ジョー君はまだあなたに言ってみせませんでしたか？」
今度は俺が腹を抱えて笑ってしまったね。出任せもいいとこだ。いやはやなんとも、口から生まれてきたインチキ野郎とは、正にこの黒んぼを指して言うんだなあ。

しかしだな、これが、もし相手がハンクじゃなくて、『ブルドッグ』ウーデン少尉だったとしたら、俺達二人は、早速ベ平連に電話をしてだな、脱走の準備をしてもらわなければならないだろうな。なぜかというのだ、『ブルドッグ』ウーデンに噛み殺されるか、軍法会議に掛けられて銃殺になるかのどちらかを選ばなければならないだろうからな。もっとも、ベ平連の連中に、なんと言うかはまだ考

えていないけどね。たぶん、B・Bならこう言うだろうな。「やあ、ベ平連の諸君。我われは、ジュネーブ条約に基づいた、正規の捕虜の扱いを希望する。くれぐれも人種差別はしないように。特に、我われ黒んぼを、アメリカの南部へ売り飛ばさないうちに。あそこのハンバーガーは、もう食い飽きたからな」ってね。まったくB・Bときたら、ベ平連は今でも敵だと思ってんだからな。

でだな、ハンクの白カボチャは、ユーモアを解するお偉い白人だから、まあこういう事も言えるんだけど、しかし、さすがにハンクの白カボチャが赤カボチャに変わったね。B・Bのやつは、真白い歯を十メートルも突き出して笑ってるんだ。ハンクも顔をしかめながら、ぎこちなく笑ったな。そしてこう言ったんだ。いやあ、この時ばかりは、さすがに士官さまの頭のできはちがうと感心したね。

「昔、ソニー・リストンがマーティ・マーシャルとの試合で顎を割られたな。どうしてあんなのろま野郎にやられたんだって聞くと、リストンはこう言ったんだ。『なあに、あの道化野郎が俺に近付いてきたんで、大笑いしようと口を開けてたのさ』ってな」

B・Bが、今度は真黒い顔から真白い歯を百メートルも突き出して笑いやがった。ハンクは微笑みながら続けたな。

「ところで、両君。いつまでも大口開けて笑っているのはかまわないんだが、私のフックが飛んで行くとは、夢にも思っていないみたいだな……。さあっ、この黒んぼ共！ キャンプ・ザマとの試合は明日なんだぞ。笑ってる暇があったら、さっさとシュートをしてこい！」

突然、ハンクが偉い剣幕でどやしたてたんだ。この白カボチャは十秒に一回は喚かないと気が済まないんだからな、まったく。

「はい、ベトナムへ爆弾を落しに行つてまいりますです」

B・Bと俺は、お互いの顔をギョロ目で見合いながら、脱兎のごとく走り出したんだ。

B・Bにはもう話したんだが、なぜ俺がダンクシュートをやろうとするか、本当のところはこんなだ。いいかい、よく聞きなよ。

バスケットボールは、アメリカ人なら誰でも、メシや、それこそセックスよりもメチャクチャに好きなスポーツなんだなあ。国じゃ、ガキの頃からみんなやってたな。白人の家じゃ、ガレージの軒下に必ずバスケットリングが取り付けてあったんだ、ほんの二つ三つのハナタレガキの頃に、親父から手解きを受けるんだ。俺は、貧乏だらけの暇なし黒んぼを親父に持ったおかげで、まだ立って歩けないうちから、毎日、ハーレムのあの狭い公園でバスケットをやったんだ。なにしろ、あの狭いコートの中に、百万人ぐらゐも貧乏黒んぼが集まるんだから、ボールに触るだけでも、もう大変な事なんだ。ここでボールに触ることに比べりゃ、天国まで行ってたんだ、イエス・キリストにご挨拶してくる事なんか、屁みたいなもんだ。

ジャッキー・グリーンはだな、ほら、知ってるだろう。こいつは後に、オール・アメリカンの百メートルで四位になった程の素早いやつなんだが、この頓馬な黒んぼは、前にボールを触ってから、まる三年もの間ボールに触ることができなかったんだぜ。毎朝早く来てだ、夕方帰るまで、唯ただ走るだけさ。右へ行ったり、左へ行ったりだ。なにしろ、リバウンドのボールに、黒んぼの手が十萬ぐらゐも出るんだからな。しかし、おかげでやつは、足が丈夫になって一流のスプリンターになれたんだ。今じゃやつも、アメリカン・フットボールのプロチーム、マイアミ・ドルフィンズワイドレシーバ

いさ。大したもんだよ、まったく。

このコートで、ガキの頃鍛えられた連中の中から、バスケットのプロプレーヤーが何人も誕生して
るんだぜ。中でも、R・ハケットがなんといってもその代表だね。なにしろハケットときたら、八歳
の時に、既にエンパイヤと同じぐらい高かったんだからな。いやあ、物凄かったな、あいつは。いっ
ぺん見せてやりたかったな、本当だぜ。セフィートはあったという、ピッツバーグの鉄の英雄「ジョ
ー・マガラック」とどっちが凄いか、今でもしばしば議論の種になるくらいだからな。

まあ、そんな気の抜けない所で鍛えられたんで、物心付く頃はちよいとした街の英雄さ。なにしろ
俺のドリブルときたら、それこそ百人東になってもカットできないんだからな。いや、本当だぜ。こ
こと思えばまたあちら、あちらと思えば、もう既にカットインシュートを決めてだな、コートサイド
の女の子のシリを二十人ばかり撫でて、タバコを十本吹かしてだな、コーヒーを飲んでから、ちゃん
とディフェンスに戻って居たくらいなんだからな。まあ、それほど素早かったんだ、俺は。だから大
人達の賭試合があると、よくチームに引つ張られたもんだ。おい、素人のチームだと思つて馬鹿にし
たら大変だぞ。嘘だと思ふなら、プロとやらせてみるがいい。まあ、ロックフェラーほどの金持ち
が、みんな挙つて全財産を素人チームに賭ける事は目に見えてるな。当然な事さ。なにしろ、生れる
前からバスケットをやってきたような連中なんだからな。バスケットの虫さ。プロつてのはな、大学
でプレーしたやつらじゃなきゃ入れないんだ。だがやつ等はいろんな問題で、やつぱり出来が悪いの
が最大の理由なんだが、大学へ行けなかった連中なんだ。それにだ、大学の一流プレーヤーが、例え
ばだ、家業を手伝うとかでプロに行かなかつた連中が来てやるんだから、もうプロチームと同じよう
なもんさ。それに金が賭かつてるから、みんな真剣さ。負けるとパアだからな。休日だけ、てんでに

集まって来て、その日だけの即席チームを作るんだ。イギリスの紳士みたいなのも居れば、街のチンピラも居る。警官も居ればこそ泥も居る。誰が何をやっていようと、その時だけは関係無しなんだなあ。要するに、バスケットが好きで好きでたまらない連中なんだ。俺は、一日に五試合も掛け持ちをやったもんだ。五試合だぞ。一日に五試合、全部に出っぱなしなんだぞ。凄いスタミナだろうが、え。よく稼いだなあ、あの頃は。この分で稼いだら、後二年でニューヨーク州を全部買えるって、真剣に思ったもんさ。

そうそう、今でも思い出して身震いするんだけど、最高にエキサイティングな試合があったんだ。これはぜひとも話したいんだ。まあ聞いてくれ。

いつものように、土曜日のコートはイカレたバスケットプレイヤーで一杯だった。俺は二試合程こなし、ポケットには、もう六ドルもの大金が入っていたね。一休みしていると、五十九番地のチンピラで、いつも横に歩いている「カニ」のコーキーがやって来て、例の頓馬な顔でだな、甲高い声でこう言うんだ。

「やあ、おい天才プレイヤー。捜したぞ。一仕事あるんだが、どうだい」

「相手は誰だい？」

「なあに、大したやつ等じゃない。ほんのドリブル三回でケリが着く連中さ」

「俺なら一回さ、コーキー」俺は自信満まんに答えたね。吹いたもんさね。

「そうとも坊や、お前なら軽いもんさ。その調子だ、ハッハッハ。実は、ハーレムの間抜けな警察チ